

「わたしの人生の前夜」←題は自分で好きに付けてください

人間関係科 11期 藤田 嘉子(旧姓 小澤)

・どうしてニンカンを受験したのか、なぜ入学したのか

カトリックの高校に在籍していて南山短期大学は身近にあった。

高校3年のときは理系学部への受験を考えていたが、2学期の時点で当時の担任から「一般受験でなく、特別入試で南山大学に進んではどうか」と提案された。

わたしは「大学でなく短大へ」という希望を伝えた。

わたしが南短に入学したいと思った理由は、進学先としての南山大学には希望する学部学科が思いつかなかったことや、人関に一般受験で入学できそうにない(偏差値評価では国内2番目だった)と思ったからだ。また、卒業後の就職率が高かったことも挙げられると思う。

特入での進学を決めてからは、高校生活を淡々と過ごしていたが、合格が嬉しくなかったわけではなく、達成感としての実感がなかったという感じに思える。

後になって、受験していたらと思うことはあるが、人関に在学したことはわたしにとって、成るべくして成ったことだと思えば後悔はない。

・ニンカン時代の私

具体的に記憶に残っているのは受講した5つの合宿での出来事や、フィールドワーク先でのこと、卒業研究で期の違う(12期)一部の人たちと関わったことなど、ごくごく断片的にしかな覚えていない。

<5つの合宿>

・生活合宿

生活合宿で出会った仲間とは、2年間を通じて親交があった。また、同宿だったメリット先生、津村先生、文珠先生方も私にとって特別な先生だ。

生活合宿の思い出は、深夜まで仲間たちと車座になって話をしたことや、「肝試し」で、深い暗闇の中に隠れて次の人がやってくるのを待っていて驚かせたこと、23キロを歩いた時の友人の様子などたくさんの場面を覚えている。

・Tグループ合宿

合宿で初めて御岳(名古屋市休暇村)に行った。

その直前にわたしは「こっぴどい失恋」を経験していて、友人は合宿の間中私の様子を心配してくれたと後になって知らされた。

同じグループだった一人は親友になり、卒業後もつながっている。

グループのことはほとんど覚えておらず、合宿が終わってから文珠先生が逐語を作成することを提案してくれ、文珠先生とふりかえりもしたが、グループでの内容は記録していない。

その時、文珠先生から「10年くらいたったらもう一度参加してみるといい」と言われたことをずっと覚えていて2007年に2回目の機会を得た。

・ワークショップ合宿

直前に津村先生から『野外生活』をしようと思うが、参加するか？」と伝えられた。

当時、わたしはウォークマンを携えていたので、「持ち込みはできないが、できるか？」と言われ「参加する！」といった記憶がある。

キャンプ場での生活は、仲間たちのたくさんの思い出になった。

帰宅してから、体調を崩し、聖霊病院で受診した。

・創造性開発合宿

メリット先生のお住まいのあった長野・浦に行った。

神言会の神父さまが運転してくれた古いバスで移動した。

集会所に寝泊まりしていて、生活合宿のように自炊の合宿は楽しかった。

グラバア先生が体操をしてくれたのを覚えている。

ちょうど、合宿中に御岳山の噴火の知らせがあり、浦でも地震を感じた。

・卒業合宿

一番よく覚えているのは会澤先生とアップリケのモチーフをつなぎ合わせる作業を夜な夜なやっていたこと。

その作業で夜更かしが続いていたので、ある日、友人が起こさず、寝かしてしてくれたことがあったが、その日は「人関かるた」をやっていて、途中からの参加になり残念だった。

<フィールドワーク>

養護学校に通った。

初めての日に「どうして自分がここにいるのか？」ということを考えていたのを覚えている。なぜ、障害のある子どもたちとの時間が必要なのか、何をすればいいのかがわからず、一歩も動けなかった記憶がある。

だんだんと子どもたちとの時間が当たり前で、尊い時間を感じられるようになっていった。

「こっぴどい失恋」をした直後、自閉の子供がずっと近くにいてくれたことがあり、言葉の交流がなくても、気持ちに寄り添ってくれ、支えられた体験だった。

<卒業研究>

「グループプロセスの観点から、グループの成長を見てみたい」とメリット先生に相談し、1年生のフィールドワークのグループとつないでもらった。そのグループの学内授業に同席したり、フィールドワーク先にも同行しながら数か月をすごした。

この時のグループメンバーは生活合宿で一緒だった人、Tグループ以降の親友、高校時代からの友人で、2年間の同期生のつながりが結集したメンバーだった様にも思える。

レポートをまとめるにあたって、5人でベタニアで合宿をしたことも何度もあった。また、卒業後も御岳に泊まりに行ったりと交流が続いた。

・卒業後の私

企業の事務職として働いたが、ブルーカラーの職場で単なる事務職ではなく、同僚の男性たちと一緒にいられた感じのする職場だった。

1990年に「職場結婚」し、退職して家庭に入った。

1991年、1992年と続けて出産し、以降、専業主婦・母として過ごした。

1995年の年初に夫の転勤で兵庫県に移ったが、直後に阪神大震災に遭い、自分にできることは何かを考え、自分自身に問う時間があった。

また1997年には「神戸の児童殺傷事件」があったが、第1子は小学校に入学し、かつ、3人目を妊娠していて、「親として子供を守れるか」といったことを深く考えた出来事だった。

2000年に名古屋に戻り、2年後からは南山大学・心理人間学科で臨時職員の縁をもらった。

5年目(最終年)の2006年の年末に夫が心臓の手術を経験した。その入院中にグラバア先生から勧められ、次の仕事につながった。

次の職場は学校(中学併設の高校)の、スクールカウンセラーだったが、生徒たちとの関りのほか、同僚である教員や保護者との関係作りなど、多岐にわたりつつ、精神的にも時間的にもハードな時間を過ごした。その間は、保護者として知っている世界の別の側面を見る思いで過ごした。

9年間続けたが、第3子の高校卒業を機に離職した。

2017年からは、南山大学・人間関係研究センター事務局の臨時職員として働き5年を満了したが、その後また、復帰し今につながっている。

また、2000年から文珠先生に誘われHIL(ヒューマンインターアクション・ラボラトリー)との関りが始まり、文珠先生だけでなく、中堀先生、山口先生、そして、楠本先生、また、南山の先生など、ラボラトリーに関わる多くの人たちとのつながりができ、それはわたしにとって宝物だと思っている。

・今、思うこと

HILでの活動が始まった頃は、なかなか自分に自信が持てず、よく「新しい自分を見つける」とか「自分の持っているものを確認する」といったことを考えたり、発言したりしていた。

その後、高校での勤務中はHILの活動には関われなかったが、生徒たちとの関りがわたしにとって、自分のあり様の確認や考え方の道筋を明確化する作業などにつながったと思える。

結果、今の人関センターでの勤務やHILでの活動に、わたしなりのあり方でいることが出来ている実感や、自信を持って関われる限界を知ることが出来ていると思える。

・これからの願い

(これからの書き進めます)